

社会科の本質と主体的・対話的で深い学びに焦点を当てた 中学校社会科の実践的研究 －兵庫教育大学附属中学校での3つの授業実践事例をもとにして－

Practical Study Focused on the Nature of Social Studies and Proactive, Interactive and Deep Learning: Based on Three Lessons at Middle Lab School, Hyogo University of Teacher Education

福田 喜彦* 阪上 弘彬** 安永 修***
FUKUDA Yoshihiko SAKAUE Hiroaki YASUNAGA Osamu

藤 春竜也*** 橋 理美***
FUJIHARU Tatsuya TACHIBANA Masami

本研究の目的は、社会科の本質と主体的・対話的で深い学びに焦点を当てた社会科授業の方略を明らかにすることである。本研究で対象としたのは地理・歴史・公民の3つの分野を学習する生徒達である。特に、社会科の中で獲得させたい資質・能力を育成しながら、共通のテーマで他教科との「バランス」のとれた授業や単元をめざすことが社会科の本質を踏まえた教科横断的な学びにつながるのではないかという仮説のもと、以下のリサーチ・クエスチョンを設定し、授業実践を分析した。

- ① 兵庫教育大学附属中学校の社会科では教科の本質を踏まえた「深い学び」をどう捉えているか。
- ② ①を踏まえて、生徒がどのような状態になれば教科の本質を踏まえた「深い学び」に至ったといえるのか。また、生徒の学びの姿はどのように変わるのか。
- ③ ①と②をもとに、どのように社会科授業をつくれればよいのか、実際の社会科授業はどのようなものか。

地理・歴史・公民の3つの授業事例を比較し、授業者がどのように授業を実践したのかを分析した結果、地理・歴史・公民のねらいを踏まえ、社会科の本質と主体的・対話的で深い学びに焦点を当てた中学校社会科授業の具体が明らかとなった。

キーワード：中学校社会科，クロスカリキュラム，地理的分野，歴史的分野，公民的分野

Key words : junior high school social studies, cross curriculum, history, geography, civics

1 問題の所在

本研究の目的は、社会科の本質と主体的・対話的で深い学びに焦点を当てた社会科授業の方略を明らかにすることである。新しい学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」が1つのキーワードとなっている。兵庫教育大学附属中学校（以下、本校と略記）においても、単なる「主体的・対話的な学び」ではなく、それらとともに「深い学び」を実現していくために、クロスカリキュラムを基軸にして文部科学省国立教育政策研究所の教育課程研究指定授業「カリキュラム・マネジメント」の研究が継続して取り組まれてきた。一方、教科教育学研究においても教科の本質が問い直されている。例えば、日本教科教育学会が刊行した『教科とその本質－各教科は何をめざし、どのように構成するのか－』（教育出版、2020年）では教科の本質を知識内容の構造か学び方の構造かを問うている。では、本校の社会科においては「深

い学び」をどう具体化しようとしているのか。

本校では、社会科の中で獲得させたい資質・能力を育成しながら、共通のテーマで他教科との「バランス」のとれた授業や単元をめざすことが社会科の本質を踏まえた教科横断的な学びにつながるのではないかという仮説を設定し、その仮説に基づいて主体的・対話的で深い学びの促進を図り、教育実践レベルの考察を深めてきた。そこで、以下のような問いを設定した。

- ① 兵庫教育大学附属中学校の社会科では教科の本質を踏まえた「深い学び」をどう捉えているか。
- ② ①を踏まえて、生徒がどのような状態になれば教科の本質を踏まえた「深い学び」に至ったといえるのか。また、生徒の学びの姿はどのように変わるのか。
- ③ ①と②をもとに、どのように社会科授業をつくれればよいのか、実際の社会科授業はどのようなものか。これまでに本校では、あるテーマによって教科・領

*兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻社会系教科マネジメントコース 准教授

令和2年7月17日受理

**兵庫教育大学教員養成・研修高度化センター 助教

***兵庫教育大学附属中学校 教諭

域等を横断的につなぐカリキュラムを「クロスカリキュラム」と定義し、設定されたテーマについて関わりのある内容を教科・領域横断的に扱うことで、個々の教科・領域だけでは身に付きづらい資質・能力を育成しようとしてきた。こうした研究課題のもとで特に、本校では、「板書型指導案」を提案し、生徒たちがどのようにすれば、「主体的・対話的で深い学び」となるのかを教科横断的に研究してきた⁽¹⁾。例えば、2019年度の7月の研究公開授業の1つである藤春竜也による歴史的分野「冷たい戦争と世界の動き」では、生徒自身が立てた問いをもとにして、第二次世界大戦後、経済の考え方の違いにより生まれた冷戦という対立構造ができた背景と具体的な対立内容にどのように迫ったのかを研究授業の学習課題に設定し、探究的な学びを追究した⁽²⁾。

本実践の事後検討会では、他教科の教員も交え、生徒の学びへ向かう主体性が継続されていたか、生徒同士の対話的・協働的な活動を通して、考えを深めることができたかといった視点で研究が進められ、新たな課題として生まれたのが社会科の本質の問題である。

そこで、本稿では、こうした本校での教科横断的な事後検討会の蓄積をもとに、3つの実践を分析対象とした。本校社会科教諭の橋による「アフリカ州」、安永による「大航海時代」、藤春による「消費生活と経済」の3つの授業実践である。2019年11月1日の公開授業Ⅰで実践された橋と安永の授業及び、2020年1月15日の公開授業Ⅱで実践された藤春の授業を福田と阪上が指導助言を行った。なお、データ提供の許諾を得た上で、事前事後の授業カンファレンスを考察した。(福田喜彦)

2 授業構成のねらいと実際—地理的分野「世界の諸地域 アフリカ州～アフリカの課題と展望～」

2.1 教材解釈

これから先の100年間において、世界人口に占める割合や経済成長率など、最も発展が期待されるのがアフリカ州である。しかしながら、現在のアフリカ州は様々な問題を抱えている。そこで、地域的特色や産業を学習する中で、これまでのアフリカ州とこれからのアフリカ州について、多面的・多角的に考察することを目的とする。

公開授業までは、アフリカ州の実態をつかむために資料を活用しながら学習を進めてきた。第1時では「アフリカ州の自然(地形・気候)、歴史、文化の特色」について、基礎的・基本的な知識を身に付けた。第2時では「アフリカの産業」について、歴史的背景からヨーロッパ州とのかかわりを読み取った。また豊富な資源があるにもかかわらず貧困が続いている現実を、アフリカ州の国々の社会構造などから考察を行った。第3時では「アフリカ州内部の様々な問題」について、日本や世界と比較しながら考えることで、アフリカ州だけではなく世界とのかかわりにも関心を深めることができた。

公開授業では、「オリ・パラとアフリカ州」と題し、これまでの学習を通して学んできたアフリカ州の抱え

る問題を、より身近に考えることができないかと思い、クロスカリキュラムのテーマでもある「オリ・パラ」とつなげることとなった。2019年度は第1学年独自のパフォーマンス課題として、スポーツをするにあたり欠かせないものの1つであるルールやそれに基づいたジャッジについて、「公平・公正の進化」に焦点を当ててカリキュラム作成を行った。保健体育の「サッカー」を軸に、道徳の「タッチアウト」、理科の「音の現象」などの他教科とクロスさせながら授業を行った。

現在に至るまでアフリカ州では、オリンピック・パラリンピックが開催されていない。そのことについて、クロスカリキュラムの「公平・公正」の立場から、「アフリカ州で開催されていない理由」を、アフリカ州だけではなく、すでに学習したヨーロッパ州とも関連付けて調べ、「開催するならどこがいいのか」をテーマに、未来について考えていく。

しかし漠然と考えていくのではなく、生徒にアンケートを実施し、「自然環境」、「文化」、「歴史」、「経済」、「産業・資源」の5つの視点から調べ学習を行ったうえで、様々な視点からアフリカ州の問題に気づき、身近に迫った東京オリンピック・パラリンピック2020と関連付けてまとめを行うこととした。

2.2 単元の指導

題材名「世界の諸地域 アフリカ州～アフリカの課題と展望～」

2.2.1 目標

○これまで学習してきたアフリカ州の概要を理解したうえで、さらにオリンピック・パラリンピックという新たな視点で資料を読み取り、意欲的に追究している。【主体的に学習に取り組む態度】

○アフリカ州でのオリンピック・パラリンピック開催に向け、取り組むべき課題について意見交換をしながら、様々な視点から考えまとめることができる。

【思考・判断・表現】

○現在のアフリカ州が抱える問題について、産業や文化などの多くの視点から理解している。【知識・技能】

2.2.2 授業計画(後頁を参照)

2.2.3 授業の実際

自分の興味のあるテーマについてのアンケートをみると、自然環境・文化・歴史・産業・資源については、これまでの授業でも取り上げ、学習してきたため、多くの生徒がこのテーマに関心をもっていた。逆に経済については、まだイメージが付きづらく、どんなことを調べればいいのかわからないため、希望者は少なかった。それでも産業と合わせて考えることで、自分たちなりにまとめを行うことができていた。

「文化」班の生徒

ケープタウンで開催できる。サッカーは開催されているし、多言語を話し、交通網も発展している。また温暖な気候で、水もある。ただ赤字が多い。

2.2.2 授業計画

<p>3-3-4 オリ・パラとアフリカ州</p> <p>めあて これからのアフリカ州を考えよう！</p> <p>○いろいろな視点</p> <ol style="list-style-type: none"> 1, 自然環境 2, 文化 3, 歴史 4, 経済 5, 産業・資源 <p>Q1. アフリカ州でオリ・パラが開催されていない理由を考えよう！</p>	<p>各班の発表（5班）</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <tr> <td style="width: 50%; height: 40px;">自然環境</td> <td style="width: 50%; height: 40px;">文化</td> </tr> <tr> <td style="width: 50%; height: 40px;">歴史</td> <td style="width: 50%; height: 40px;">経済</td> </tr> <tr> <td style="width: 50%; height: 40px;">産業・資源</td> <td style="width: 50%;"></td> </tr> </table> <p>Q2. アフリカ州でオリ・パラを開催するなら、どこがいいだろう？</p>	自然環境	文化	歴史	経済	産業・資源	
自然環境	文化						
歴史	経済						
産業・資源							

<p>本時の流れ</p> <p>①前回までの復習（5分） アフリカ州でオリ・パラが開催されていない理由を考えるための視点の確認。</p> <p>②「オリ・パラが開催されていない理由」について考え、まとめる。（15分） ※各自で調べてきた内容を班の中で意見交換し、まとめる。</p>	<p>③班ごとに発表する。（20分） ※各班5分交代で行う。</p> <p>④授業のまとめ（10分） 各班の発表をふまえて、開催するならどの場所がいいのかを考えていく。 ※個人で考え、口頭で発表する。</p>
---	--

「自然環境」班の生徒
ケープタウンがいいと思う。全体的に見てもケープタウンのメリットが多いし、経済や産業が発展しているから。ただ大麻が生えているのが良くないから工夫をする。

「文化」班の生徒
どこもできない。それぞれの国の問題が多く、会場を作ったとしても赤字になる。

「歴史」班の生徒
ケープタウンがいい。経済的には少し少ないが、オリンピック会場の設立や、ケープタウンの人々は色々な言語が話せる。（英語、フランス語）でも人口の30%が食糧難なので、難しいが寄付などで頑張る。

5つのテーマにそれぞれ5人ずつを振り分け、調べ学習を行った。同じ班の中でもテーマによってはさらに細分化して担当を決め、調べ学習を行っている班も見られた。例えば自然環境の班はさらに、気候・地形・時差・疫病など、様々な視点から調べ学習を行っており、これはその後の班でのまとめにも活かされていた。公開授業では、各班が調べてきた内容を共有し、教師が指定していた4つの都市（ガーナ・カイロ・リーブルビル・ケープタウン）の中から、「オリ・パラが開催されない理由」についてまとめを行った。

各班の発表後、「アフリカ州でオリ・パラを開催するならどこがいいか」を各自で考えさせた。自分が調べたテーマ以外の発表もいい刺激となり、様々な意見が見ら

れた。まとめの意見からは、ケープタウンで開催するのがいいと結論を出した生徒が多くみられた。

しかしその理由については、気候・経済・言語など、根拠となる部分については大きく異なっていた。また現在のアフリカ州の現状を踏まえて、今の状況ではどこもできないと結論を出した生徒も多くみられた。今回は時間の都合上、個人で考えてまとめを行ったが、班活動をする事により、4つの都市以外にも自分たちが候補地を挙げるなど、より多面的な視点から開催場所を考えることができたのではないかと考える。

今回の授業では、遠い地域であるアフリカ州について、表面的な問題だけではなく、オリ・パラという身近な世界的大会と絡めることにより、多角的・多面的に物事を考えることを目的に取り組んだ。これまでは1つの州のあるテーマに絞って資料の読み取りを行ってきたが、今回のように様々な資料を組み合わせながら、全体を見るのは初めてのことだった。1年生の段階では依然として、物事を多角的・多面的に見る力がそれほど身につけていないが、今後もこのような授業をすることにより、世界で起こっている課題について、より身近に考えることができるようになると思う。また、地理の授業が苦手な生徒も、他の生徒と協力することにより、班の中での役割や当事者意識をもって活動に取り組むことができた。今後も、生徒の興味関心を引き出し、自ら考え答えを見つけることができるような資質を育てていけるような授業づくりを行っていきたい。

（橘 理美）

3 授業構成のねらいと実際—歴史的分野「1 つにつながった世界～大航海時代と日本～」

3.1 教材解釈

本時のねらいは、大航海時代にヨーロッパ諸国が世界へ進出していく中で、やがては日本にもその影響が及び、1 つにつながっていく歴史的成立過程を学ぶことにある。文明と文明との交流、人と人との交流によって、新しいものを生み出したり、それをより発展・進化させたりして活力が生まれる。そして、その後の人々にとって有益なものを生み出すこともある。その1 つの例がルネサンスの3大技術である。

一方で負の部分もある。相手との考えや宗教などの違いから争いが起きたり、相手の状況を知ることで、強い者が弱い者を支配したり、資源や利益が奪われたりする、そのことがその後の植民地支配にもつながっていくことにもなる。

この授業は、2年生の10月下旬に行った授業である。1年生の3学期で学習して以来の歴史的分野の学習の再スタートに当たり、これから歴史について学んでいく視点や意義に気付かせ、考えさせたいと思い、授業計画を立てた。今回学習する「中世から近世へ」のあたりから、ヨーロッパを中心とした世界がグローバル社会に入っていく、その波が日本にも押し寄せてくることになる。この単元の学習を通じて、そのような世界全体との関係性や、強い者が弱い者を支配していく状況、そのような状況の中で何が起き、何を生み出していくのか。世界の人々にとって、そして日本にとってどのような影響をもたらすのかについて、事例を通じて考えさせ、気付かせ、学ばせていきたいと考えた。

単元名は「1 つにつながった世界～大航海時代と日本～」で、4時間構成とした。第1時が「イスラム教とキリスト教の世界の動きについて考える」、第2時が「ヨーロッパ人による大航海に乗り出す目的について考える」、第3時が本時で、第4時が「大航海時代の潮流にのみ込まれていく日本について考える」とした。

本校では2018年度より、教科横断的な取組みの「クロスカリキュラム」の研究を進めており、2019年度は2学年独自のパフォーマンス課題として「オリ・パラ×進化×食」というテーマで年間の授業を計画していた。このうち本時では、「食文化の広がり」と技術の進化」というテーマで、道徳の「ハラルマーク」、理科の「冷凍技術の進化(吸熱反応)」などの他教科とクロスさせながら授業を行った。公開授業では、まず導入として、2020年東京オリ・パラに、仮に国連加盟国及び地域の196か国が参加したとして、それを主な宗教別に分けるとどうなるか。そして四大宗教において、宗教上食べられない食材は何かについて、地理的分野の復習を行った。その次に、授業用プリントにある資料をもとに、南アメリカ原産で「悪魔の作物」と言われた農産物は何か、そしてそれがヨーロッパに持ち込まれ、ヨーロッパの人々のくらしや国がどのように変わっていったのかについて予想を立てさせた。その後、ヨーロッパとそれ以外

の地域とのつながりについて、資料を見ながら輸出・輸入の関係について考え、まとめさせた。その上で、アフリカからアメリカ大陸に連れていかれる「奴隷」について考えさせた。ここまでが「個人」での作業である。そして、ここからが班での作業となり、ヨーロッパを中心とした南北アメリカやアフリカ、アジア地域との貿易関係の成立・発展について話し合いながら考えさせた。具体的には、資料の「新航路発見後(18世紀)」を参考に、①「南米からヨーロッパにジャガイモが伝わる」ことで、次に「ヨーロッパの人々の生活が豊かに、そして国力が強くなり」、それ以降の展開について、生徒一人ひとりが歴史のストーリー(物語)を考える学習を行った。考える視点として、貿易では何かを手に入れようとするれば、相手の求める何かが必要となり、そして今度はそれを手に入れる必要が生じてくることを示した。生徒に歴史のストーリーを考えさせることを通じて、大航海時代の意義についてのまとめを行うこととした。

3.2 単元の指導

題材名「1 つにつながった世界～大航海時代と日本～」

3.2.1 目標

- 具体的な事例を通して、大航海時代の意義について関心を持ち、その歴史的背景や経緯について、意欲的に追究している。【主体的に学習に取り組む態度】
- ヨーロッパを中心とした周辺地域との貿易の発展過程について、話し合いを通して多面的・多角的に考察し、発表している。【思考・判断・表現】
- 新航路の発見がヨーロッパと他の地域との交易を盛んにすると同時に、ヨーロッパの動きに組み込まれて、世界の一体化が始まったことを理解している。【知識・技能】

3.2.2 授業計画(後頁を参照)

3.2.3 授業の実際

まず、最初の地理的分野の復習については、生徒たちはよく覚えていて、特に宗教上、食べられない食材については、よく理解していた。その上で、本題のジャガイモを取り上げることになるのだが、前もって技術科の授業でジャガイモについて習っていたので、授業用のプリントにある資料の中の「原産地が南米のアンデス高原」で、土の中に種をまき、種で増やしていくあたりで、この食材がジャガイモであることを言い当てる生徒が多かった。この後のジャガイモが大航海時代に南米からヨーロッパに持ち込まれ、ヨーロッパの人々のくらしや国がどのように変わっていったのかを予想を立てさせたところでは、寒冷地などの自然環境の厳しいところでも育つジャガイモにより、人々の食卓が豊かになったり、健康になったりといった意見は出たが、それが国力の充実にまでつながっていったという意見はあまり出なかった。人々のくらしと社会との関係を結び付ける視点が、まだまだ身につけていないと考えられる。次に、ヨーロッパとそれ以外の地域とのつながりについてまとめるところでは、資料をもとに輸出・輸入の関係をまとめるので、資料の読み取りができれば、ある程度はま

3.2.2 授業計画

P102~P103 <大航海時代の意義について考える>

【めあて】 大航海時代が世界に与えた影響について考えてみよう。

◇主な宗教別
 ・仏教：14, キリスト教：155, イスラム教：82, ヒンドゥー教：10

◇気を付ける食材
 ・イスラム教：ブタ, ヒンドゥー教：牛
 ・キリスト教・仏教：特になし

◇ジャガイモ
 ◇その後のヨーロッパの人々のくらし・国
 (例) 食卓が豊かになる。人口が増える。
 国力が豊かになる(充実する)。
 国が強くなる。

◇ヨーロッパとそれ以外の地域とのつながり
 (ヨーロッパとアメリカ大陸)
 ・アメリカ大陸から銀・砂糖を輸入
 ・ヨーロッパから毛織物を輸出
 (ヨーロッパとアフリカ)
 ・アフリカから金・象牙を輸入
 ・ヨーロッパから武器・日用品を輸出
 (ヨーロッパとアジア)
 ・インド・ジャワから香辛料, 中国から絹を輸入
 ・ヨーロッパから銀を輸出(支払い)

いくつかの班の発表
(テレビ画面に映し出す)

【本時の流れ】

①【導入】東京オリンピック・パラリンピックの宗教別参加国や、宗教上の問題から気を付ける食材について考える。(5分)

②【資料の検討】ジャガイモがヨーロッパに渡っていった物語や広がっていった様子、その後のヨーロッパの変化について、ワークシートの資料を読みながら考える。(10分)

③【資料の整理】ヨーロッパとそれ以外の地域とのつながりについて、資料を見ながら輸出・輸入の関係について考え、まとめる。その上で、アフリカからアメリカ大陸に連れられる「奴隷」の理由について考える。(15分)

④【班学習・発表】ヨーロッパとそれ以外の地域との貿易関係の成立・発展について考え、発表を行う。(15分)

⑤【振り返り】大航海時代の意義や世界に与えた影響など、この学習を通じて分かったことや思ったことについて振り返る。(5分)

【資料1 当日の配布資料(1枚目)】

「大航海時代の意義」について考える

2年 組 番 名前 _____

◇仮に地図帳の統計資料にのっている199か国全てで、東京オリンピック・パラリンピックに参加したとして、「主な宗教」別に分けると、どうなりますか。延べ数で教えてください。

・全体で199か国
 仏教： _____ , キリスト教： _____ , イスラム教： _____ , ヒンドゥー教： _____

◇東京オリンピック・パラリンピックの選手にはたくさん選手が宿泊します。ここで問題となるのが宗教上、食べられない食材です。次の宗教に対して特に気を付ける食材は何でしょうか。

・キリスト教： _____ ・イスラム教： _____
 ・ヒンドゥー教： _____ ・仏教： _____

◇右の資料を見て、当てはまる食材(農産物)は何でしょうか。この食材はどの宗教でも食べられるのです。

原産地は南アメリカのアンデス高原(ペルー・ボリビア周辺)です。16世紀にスペイン人がヨーロッパに持ち帰りました。人々は驚きなく、種で増えるので、「悪魔の作物」と嫌いました。17世紀にききんが起ると、国王たちはこの作物を広める工夫をしました。

◇()物語

スペイン人が持ち帰ったのは1570年頃らしい。彼らが異国の土地で初めて目にしてから30年以上が経った時点である。まず「ヨーロッパのお土産」として大西洋を渡った。ボツボツに入れて持ち帰る珍品である。それから3年後、まずセビリア(スペイン)の病院で患者の食用に供された。1600年になると、スペイン、イタリア、オーストリア、ベルギー、オランダ、フランス、スイス、イングランド、ドイツ、アイルランドにも入国を重たしていく。

寒帯地でも栽培可能というのが魅力。アンデスの4000m級の高地で生まれ、北ヨーロッパの寒帯地などもとせず、豊かな収穫をもたらした。品種改良の結果、年に複数回の収穫も可能となり、でんぷん質、無糖質(リン、カリウム)。そしてビタミンCが非常に多いとあって、寒い国々では「冬の野菜」として重大な役割を担った。

◇左の文章を読んで、ヨーロッパの人々のくらしや国はどのように変わっていったと思いますか。予想してみてください。

◇ヨーロッパの国々は、大西洋を中心とした貿易を行ったり、アジアとも貿易を行っていきます。それぞれの地域とのつながりについて、まとめてみましょう。(まとめる視点：何を輸出して、何を輸入しているか)

(ヨーロッパとアメリカ大陸)

・アメリカ大陸から _____ を輸入
 ・ヨーロッパから _____ を輸出

(ヨーロッパとアフリカ)

・アフリカから _____ を輸入
 ・ヨーロッパから _____ を輸出

(ヨーロッパとアジア(インド・中国・ジャワ))

・インド・ジャワから _____ , 中国から _____ を輸入
 ・ヨーロッパから _____ を輸出 ()

【資料2 当日の配布資料(2枚目)】

「大航海時代の意義」について考える

2年 組 番 名前 _____

◇ヨーロッパの国々は大西洋を中心とした貿易を行ったり、アジアとも貿易を行っていきます。世界との結びつきを深めていく歴史の流れについて、資料「新航路発見後(18世紀)」を参考に、歴史のストーリー(物語)を考えてみましょう。(考える視点：貿易では、何かを手に入れようとするれば、相手の求める何かが必要となります。そして今度はそれを手に入れる必要が生じてきます。)

①南米からヨーロッパにジャガイモが伝わる。→ヨーロッパの人々の生活が豊かに、国力が強くなる。

↓

② _____ ↓

③ _____ ↓

④ _____ ↓

⑤ _____ ↓

⑥ _____ ↓

⑦ _____ ↓

【振り返り】大航海時代の学習を通じて、分かったことや思ったことについて、自由に書きましょう。

とめられる。

苦手としている生徒に対しては、周りの生徒や教師の声掛けなどをすることとした。ここからが本時のメインとなる「歴史のストーリーづくり」である。まずは個人でストーリーを考えさせ、その後には班で共有しながら、班で1つのストーリーを立てさせた。

ある班のストーリーは、次のとおりである。

- ①南米からヨーロッパにジャガイモが伝わる。その結果、ヨーロッパの人々の生活が豊かに、国力が強くなる。
 →②国力が強くなると、他国との貿易が始まる。特にアメリカやアジアなどと貿易。
 →③アメリカはヨーロッパの毛織物を輸入。アメリカもヨーロッパに銀を輸出する。
 →④アメリカは銀の採掘をする。(労働)人口が足りない。
 →⑤人口が足りないと採掘できないので、アフリカを支配し、奴隷にする。
 →⑥奴隷を使って銀を採掘し、ヨーロッパに銀を輸出できるようにする。

この班は、ヨーロッパが貿易をする中で銀が必要となり、その銀を採掘するために、アフリカから奴隷を連れていき採掘させたというストーリーを考えた。これまでの学習の中で、アフリカから奴隷がアメリカ大陸に連れていかれたことを踏まえたまとめ方をしている。

また、別の班では、次のようなストーリーを考えた。

- ①南米からヨーロッパにジャガイモが伝わる。その結果、ヨーロッパの人々の生活が豊かに、国力が強くなる。
 →②領土を更に広げるために、航海が多くなる。
 →③インドへの海路がつながる。
 →④中南米で採掘した銀をアジア貿易の代金として使われる。
 →⑤マゼランが世界一周を成し遂げる。
 →⑥ヨーロッパ人がアジアやアメリカなどの国々を植民地にしたりして貿易を行う。
 →⑦ヨーロッパを中心に世界が1つに結ばれる。

インドなどのアジアとの貿易や、マゼランを持ち出して世界が1つに結ばれていくことを意識してまとめられており、授業内容を十分に理解していた。

しかしながら、多くの班ではここまでの内容にたどり着くことができなかった。理由は、時間がなかったことが挙げられる。歴史の授業が好きで意欲的に取り組む生徒がいた班では、1つのストーリーを考えることができたのだが、あまり歴史を得意としていない生徒が多くいた班では、どのようにストーリーを描けば良いか見当がつかず、時間内にまとめることができなかった。もう少し考える時間を確保して、じっくりと考え、周りと考えを共有しながら、自分の考えを構築することができれば良かったという点が課題として残された。

授業後の生徒の感想は次のとおりである。

領土とか香辛料とかのために、争いをしたりして、今の時代だと考えられないし、労働力のために、奴隷などを連れてきたりして国のためにしていることがすごいと思った。

南米からヨーロッパに「ジャガイモ」が伝わっただけで、争いが起ったり、差別が起きたりしてしまうということに驚いた。自国のためだけに奴隷というものを作り出し、今でも続いている差別が起きてしまうという世界問題も起きてしまうことを知った。

ヨーロッパは元から植民地をしているわけではなくて、様々な過程から植民地が生まれたことが分かった。銀やさとうきび、武器や日用品を売って手に入れたり、採掘したりして強くなったり、周辺地域との貿易などを支配したりして、どんどん国力が強くなり、アメリカやアフリカの国々を植民地にしたことが分かった。

今回の授業は、歴史のストーリーを自らつくることを通じて、歴史的な形成過程を学ぶことを目的に行った。ある程度、歴史の知識を積み重ねていくと、自分の考えでストーリーを作ることができるが、中学2年生の段階ではそこまでは達していないと思われる。ただ、今後このような授業を積み重ねていくことで、生徒自身が歴史の面白さを体験することができると考えられる。現に、今回の授業が終わった後、ストーリー作りを終えていない生徒が、休み時間にもかかわらず、一生懸命に他の生徒と話し合いながら考えていた。今後とも、今回のような生徒が興味を持てる教材や授業づくりを行っていきたい。

(安永 修)

4 授業構成のねらいと実際—公民的分野「消費者の権利を守るためには」

4.1 教材解釈

本時のねらいは、情報化やグローバル化が進む社会で、今後起こりうる消費者被害について見識を深めることで、社会に生きる一人の消費者として必要な資質・能力とは何かを考えさせることである。本時で学ぶ内容は、全5時間で構成された本節のねらいである「賢い消費者とはどんな消費者か」という問いを考える上で大切な要因となる。2019年に日本で導入された軽減税率と同時期に、デジタルマネーの普及も同時に行われた。また、2020年東京オリ・パラの開催が迫り、これまで以上に多くの外国人が訪日している。著しく変化し続ける社会の中で、我々は消費者として、消費活動からほとんどの人が逃れることができない。加えて、日々行う消費活動というのはあまりにも当たり前すぎて、消費をする際の選択の重要性や契約関係の締結、消費者問題について、意識することがあまりないように考えられる。資本主義経済である日本において消費者主権である私たちは、自由に財やサービスを選ぶ権利のある消費者であるという自覚と、自由であるがゆえに起こりうる、欠陥商品や詐欺などのこれまで起きてきた消費者問題について十分認識した上で、これから起こりうる新たな消費者問題について想定しておくべきだろう。公開授業では、事例を通じて、消費者を守る制度や法律を理解した上で、今後、自分が消費者被害に遭わないためにどうすればいいのか考えた。ゲームアプリの課金を利用した詐欺

や高齢者詐欺など、時代の経過とともに、消費者被害の傾向も変化してきている。これから先の社会を考えた時に、どのような消費者被害が増えていくのかを予想することによって、消費者としての自覚を深めていきたい。

4.2 単元の指導

題材名「消費者の権利を守るためには」

4.2.1 目標

○これから起こりうる消費者被害を想像することで、消費者被害が他人事でないことを自覚し、今後、自分が被害に遭わないためにどんなことを大切にしていけばよいか考えることができる。

【主体的に学習に取り組む態度】

4.2.2 授業計画

(1) 板書計画

めあて これから消費者被害に遭わないために、どんなことを大切にしていけるのか？

○消費者を守るために…

- ・クーリングオフ
- ・消費者契約法
- ・製造物責任法（PL法）
- ・消費者基本法

これからどんな消費者被害が増えそうか？

生徒の意見
(まとめ)

班の意見

(2) 題材名

公民的分野「第4章 私たちの暮らしと経済 1節 消費生活と経済」

(3) 本時で身につけさせたい資質・能力

日本に生きる消費者として、どのようなことを大切にしていきたいか、自分なりの考えをもつ。

(4) 授業目標

これから起こりうる消費者被害を想像することで、消費者被害が他人事でないことを自覚し、今後、自分が被害に遭わないためにどんなことを大切にしていけばよいか考えることができる。【主体的に学習に取り組む態度】

(5) 授業の実際

①前時の復習（5分）

②消費者を守る制度や法律（10分）

③学習課題「これからどんな消費者被害が増えそうか？」（30分）

個人・班（15分）共有（15分）

④振り返り（5分）

「変化の激しい現代社会で、消費者被害に遭わないために、今後どんなことを大切にしていきたいか？」

(6) 評価基準

B評価

授業の内容を踏まえながら、消費者被害に遭わないために、どんなことを大切にしていきたいか、自分の考えを文章でまとめている。

B評価に達しない生徒への手立て

次回の授業の始めに、A～B評価に達する生徒の考えを紹介することで、B評価に達しない生徒の考え方の幅が広がるよう支援する。

「単元を通して、『賢い消費者』とは、どんな消費者だと思いましたか？本時で学んだ内容を踏まえながら、自分の考えを書いてみましょう」

- ・先を見通せる人だと思えます。もしそれが当たっても当たらなくても先を見通してできる人だと思えます。
- ・消費者を保護する法律などがあり、そのきまりで守られているから安心ではなく、「全ては自分の選択と判断にかかっている」という自覚をもって落ち着いて行動することが当たり前のように難しい。
- ・消費者にとって大切なこととして、消費をする上でつきまとう契約の内容の意味を理解することが大切だと思えます。
- ・1つは現金とデジタルマネーを使い分けられる人、そして安くて品質が良いのを選ぶ人、最後に自分が消費者という自覚がある人が、新たに加わりました。
- ・デジタル化のメリットやデメリットが分かっていたり、契約や契約を守る制度や法律が理解しているかどうかできまると思えます。
- ・インターネット詐欺などに注意して、利用規約をよく読み、正しい知識をもって利用できる人が賢い消費者と言えますと思えます。
- ・消費者被害に遭っても、臨機応変に対応できる人
- ・一言でいうと、未来を予想できる人というのが賢い消費者だと思う。
- ・契約内容をしっかりと確認し、消費者問題について知ることだと思う（中略）現在の消費の在り方について学び、日本の社会を生きる消費者として正しく行動していきたいと思う。
- ・時代の流れに沿ったお金の使い方（今の時代で言えばデジタルマネー）に、臨機応変に対応できることが大切だと思った。
- ・僕が思うに、賢い消費者とは情報量の多い人かなと思えます。
- ・僕が思う賢い消費者は、契約する時に内容をしっかりと理解できる人と時代についていっている人だと思えます。（中略）時代は進むにつれて、カードやアプリで払う事が多くなっていくから新しいものに対応して得をえる人が賢い消費者だと思えます。
- ・デジタルマネーが普及する中で、その便利さの裏にある危険や不安な穴をきちんと見つけ、それを対処あるいは避けながら使うのも「賢い」と思う。
- ・時代が進むにつれて色々な消費者を守るためのルールができてきた。しかし、新しい法をつくれれば、必ず抜け道ができ、必ず悪くみする人も出てくる。そうした中で、様々な情報をもとに騙されないようにするのが賢い消費者であると思う。

4.2.3 授業の実際

まず①で、前時で学習した契約について復習を行った。その上で、動画（中学生向け法教育視聴覚教材）を使用し、実際に起きうる消費者トラブルにはどのような事例があるのかを確認した。様々な事例を通じて分かることは、消費者トラブルに巻き込まれないためには、一定の知識とそれをもとに状況に応じた判断力が求められるということである。

②では、再び動画（中学生向け法教育視聴覚教材）を参照しながら、消費者を守る制度（クーリングオフなど）や法律（消費者契約法など）にはどのようなものがあるのかを確認した。その上で、消費者被害はどんな種類があり、自分が一番気をつけようと思うものについて、教科書の内容から考えさせた。生徒の意見の中で多数の共感を得ていたのは、高齢者を対象にしたネガティブオプションとネット知識のない人を対象にしたワンクリック詐欺だった。このことから生徒が社会の実状として、高齢化社会が進んでいること、情報化社会に適応できていない人が多くいることを認識していることがわかった。

【主な対象】

・外国人 ・高齢者 ・ネット知識がない人

【被害にあう場面】

・Pay やクレジットカード、QR コード、アプリ利用時
・オリンピック期の販売が盛んな時期

【主な被害】

・ワンクリック詐欺、転売、架空請求、ウイルス被害

③では、授業者自身が大人になってから遭った消費者被害を紹介し、消費者被害という問題が決して他人事で

はなく、身近にいる大人でも遭う危険性のあることであるということ意識させた。その上で「変化の激しい現代社会、これからどんな消費者被害が増えるだろうか」という学習課題について考えさせた。各班で出た意見は多岐に渡るが、集約すると以下のようにまとめられる。

対象となる人々の共通点としては、やはりネットに対する知識があまりないことが挙げられる。外国人については、ネットの知識があったとしても言語という壁が被害となる。被害に遭う場面の多くもネットを介するものが多かった。簡単に支払いができるデジタルマネーがどのような仕組みで支払いがされているのかについては、今後理解を深める必要があると感じた。

また、その点を理解すれば、比較的簡単にモノやサービスが購入できる仕組みにのまれ、購買意欲が向上してしまい、自分の支払い能力を適切に判断できずにモノやサービスを購入してしまう人々の心情も理解できるだろう。ここでオリンピックという言葉が出てきたのは、今後の日本社会の変化を考えた時に、1つの大きな起点となる出来事として東京オリ・パラがあるという意識が生徒の中にあることがわかる。主な被害の内容は、知識のなさというよりも、与えられた情報を適切に判断せず、安易に行動を起こした時に起こりうる被害が多々挙げられていた。例えば、アプリを起動する際の同意書についてはかなり長い文面で書かれてはいるが、すべてを読んで理解した上で同意する人が一体どれだけのだろうか。この点について生徒に尋ねてみても、ほとんどの生徒がほとんど読まずに画面をスクロールして同意のボタンを押していると答えていた。この話を通して、現代社会が情報過多であり、私たち自身も情報を理解し判断していくことに非常に疲弊し、無関心になって

いく危険性があることを生徒と話し合うことができた。

生徒の意見を総括すると、これからの社会では、外国人、高齢者が増え、ネットを利用した消費者被害が増えることが確認できた。つまり、これからの社会は、グローバル化、高齢化社会、情報化社会を進んでいく。それに伴い、未知の消費者被害が現れること、これまで存在した消費者被害が異なるアプローチの仕方でも再登場する可能性があることも確認できた。前記した資料は、本時の終了時に生徒に記入させた振り返りである。生徒の意見の中には、契約や法律の内容を正しく理解することが大切であると回答しているものが多かったが、並んで、変化に対応する力が求められるという趣旨の内容も多くみられた。今回は消費者被害という視点から、これからの社会情勢の変化、それに伴い、私たちに求められる資質・能力とは一体何なのかについて、考えを深めることができたのではないだろうか。（藤春竜也）

5 本実践の成果と課題

5.1 「社会科の本質」を踏まえた「深い学び」の捉え

本稿冒頭で述べたように、本校ではクロスカリキュラムを基軸に、①個々の教科・領域だけでは身に付きづらい資質・能力の育成、②「主体的・対話的で深い学び」、とりわけ「深い学び」の実現、に取り組んできた。特に①に関しては、協働する力やコミュニケーション力といった汎用的な資質・能力が想定されるだろう。

子どもたちが社会に出た際に直面する課題に対処するためには、このような資質・能力が必要であるし、実際の公開授業の中でもこのような資質・能力が育まれている、あるいは発揮している姿を見ることができた。

一方で、これらは汎用的な資質・能力ゆえに、社会科の以外の教科学習や学校教育の中でも育むことができる。では、社会科でしか子どもたちに育むことができないものとは何だろうか。誤解を恐れずに言えば、これが「社会科の本質」といえるのではないだろうか。社会科は「社会認識を通して市民的資質を育成する」⁽³⁾教科であり、とりわけ「社会認識」という側面が本質に関わる部分ではないかと考えられる⁽⁴⁾。

そこで実践における「社会認識」を着目して、3つの実践授業が「深い学び」の実現に向けてどのような取り組みを実施したのかについて考察する。

5.2 3つの実践がめざすところ

5.2.1 橋実践—地域・問題を比較・相対化して捉えることができる地理学習

橋実践では、「公平・公正の進化」という第1学年共通のテーマのもと、授業が計画され、実施された。ここでは、生徒にとっては遠い地域であるアフリカ州の学習に、オリ・パラというテーマを導入することで、身近な学習内容にしようと試み、またテーマを通じて、地域間（アフリカ州と他地域、アフリカ州内）のつながりを意識させ、単元全体を通じてアフリカ州を相対的に捉えさせようとする単元構成をとっていた。

このような意図を踏まえ、公開授業ではオリ・パラが

開催されない理由および開催地の選定という学習課題が設定され、アフリカ州内の都市間を系統地理的な観点から比較させた。学習過程では、生徒たちが世界で起こっている課題を多面的・多角的に捉え、課題を身近に考えることができることをめざしていた。

5.2.2 安永実践—因果関係を考え、自ら歴史像を形成できる歴史学習

安永実践では、オリ・パラのなかでも「食の進化」という第2学年共通のテーマのもと、授業が計画され、実施された。ただし「食の進化」というテーマは、授業冒頭の導入部で触れられるのみで、授業構成に大きな影響を与えるものではなかった。

公開授業では、貿易の視点から見たヨーロッパと他地域のつながりに関する歴史のストーリーを作成する課題が設定された。大航海時代におけるヨーロッパ諸国の世界各地への進出、それにともなうヒト・モノのつながり（交流）の認識を通して、歴史における事実や流れを与えられるのではなく、生徒が自身で形成できるような展開が組織されていた。そして歴史の流れ（ストーリー）を形成できることで、生徒がその時代や出来事の意義を理解できることをめざしていた。

5.2.3 藤春実践—将来の社会問題を予測し、それに対処できる人間像を考える公民学習

藤春実践では、オリ・パラというテーマが授業構成そのものに直接影響してはいないが、授業のなかではオリ・パラによる日本の消費活動の変化・影響という社会状況が踏まえられたものになっていた。

公開授業では、これまでに学習した消費者を守る法律の理解を踏まえて、「新たな消費者問題について想定しておくべきだろう」、そして「今後、自分が消費者被害に遭わないためにはどうすればいいのか」という学習課題が設定された。そして単元のまとめでは『「賢い消費者」とはどんな消費者だと思いましたか」という課題が生徒に投げかけられた。本単元は、社会の変化に伴う新たな問題を予測し、その対応を考える学習過程を通して、生徒が社会の変化に対応できる人に求められる資質・能力を考えられることをめざしていた。

5.3 小括

3人の教師は、2018年度に引き続き、2020年東京オリ・パラに関連させて授業を計画・実践した。しかしながら各教師でオリ・パラをどのように授業に位置づけるかには大きな差がみられた。橋実践では、学習の中核にオリ・パラを位置づけ、授業を構成した。安永実践では、世界のつながりを見るための素材である「ジャガイモ」に導くための話題として活用した。そして藤春実践では、オリ・パラが授業内で直接関連づけられないが、日本の社会（消費活動）の変化にオリ・パラが関連することを念頭に入れて、学習を展開した。

また橋実践では異なる場所・地域を比較する、安永実践では歴史的事象の因果を踏まえて歴史を叙述する、藤春実践では社会情勢の変化に伴う経済の仕組みの変化を法という視点を用いて考察する、ことが学習過程で

